

## [Ⅱ 中等教育研究]

### 教科「中学2年生 英語」からみた 個別学習アシスト教室の総括と展望

藤田高弘\*・中島英貴\*\*\*・中西良文\*\*  
加藤大樹\*\*\*・駒井恵里子\*\*\*・小林香奈\*\*\*  
西口利文\*\*\*\*・田中秀佳\*\*\*・中村藍子\*\*\*  
藤本良子\*\*\*

〔はじめに〕

〔中学2年次の学習内容の特色〕

〔ケースレポート〕

〔個別学習での学習内容〕

〔個別アシスト学習の展望－英語学習を中心に－〕

〔個別アシスト学習の展望－運営・研究体制を中心に－〕

#### 〔はじめに〕

本論では、前期に中学校1、2年生の数学(英語)を対象に(名古屋大学教育学部附属中・高等学校)個別学習アシスト教室(速水・中西・矢木・藤田、2001)で行われた個別指導の中で、英語についてケース報告を交え考察を行う。

#### 〔中学2年次の学習内容の特色〕

中学2年生の英語の主な学習活動や内容をコミュニケーション活動の目標から概観してみる。<sup>1)</sup>中高一貫6年間のカリキュラムにおける中学1年の入門基礎では、自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるようにするという目標がある。個性探求期にあたる中学2年生と3年生では、中学1年の入門基礎の学習を基礎として言語の使用場面や言語の働きを更に広げた言語活動を行う。事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容、様々な考えや意見などの中からコミュニケーションを図れるようにすることが目標にある。

\* 教育学部附属中・高等学校教諭

\*\* 教育発達科学研究科博士後期課程

\*\*\* 教育学部生

\*\*\*\* 中部大学人文学部助手

1) 中高一貫6カ年の発達区分として1-2-2-1制を本校では導入している。具体的には、「個性を探る」から「個性を伸ばす」という一貫教育を目的として、6カ年を入門基礎期、個性探求期、専門基礎期、個性伸長期の4区分に分けている。

つまり、英語を通して、自分の身の回りにある人や物事を理解し表現することから他者や自分を取りまく物事の関係や事実を客観的にとらえ理解し表現するコミュニケーション能力を育てることへと発展する。

このようなコミュニケーションの発達観から、中学2年生で扱われる言語材料は音声、語彙、文法面で規則の複雑化だけではなく、抽象度や客観性も高くなっていく。具体的には、個々の単語(word)の適切な音声化だけではなく、語句(phrase)、文(sentence)、段落(paragraph)、章(passage)の各レベルで長くなることにより強勢、イントネーション、区切り等の音声化が入門期より複雑、高度になる。語彙、文法レベルで最も特徴的なことは法助動詞(modal auxiliary)の導入である。コミュニケーションの相手との関係に応じて、話し手の様々な気持ちや態度を表す語彙や意味概念を表す法助動詞、will, shall, can, may, should, must等の導入により抽象度や客観性がより高くなると言える。また、文法面での具体的特色として、準動詞と言われる不定詞や動名詞の学習がある。文法規則の複雑化だけではなく、この文法項目には、事実を客観的に表現したり、原因、理由や目的を理解、表現するコミュニケーションの機能がある。あるコミュニケーションの状況で操作する意味概念の抽象化や客観化という複雑さをともなっている。

指導者は、中学2、3年生では英語による理解度や表現力の幅が飛躍的に広がると考える。そこで、英語学習の到達度の幅が広い現在の40人一斉指導の体制の中でも、実践的なコミュニケーション能力の育成という観点に立つと、英語による多様な言語活動を授業で実施する。コミュニケーション活動に重点を置いた言語活動では、上記の助動詞や不定詞・動名詞といった語彙、文法的な意味や規則に関する知識を明示的に教えるよりも、語彙、文法的な意味や規則を非明示的に運用する学習活動になる。言い換えるならば、<sup>2)</sup>Language UsageよりLanguage Useを重視した学習活動になる。言語の運用能力を高めたり、学習者参加型の授業を目標にすると、このような言語活動を多く取り入れることになる。

音声、語彙、文法の規則の複雑化、操作する概念の抽象度の高さ、言語運用能力高める言語活動をともなう英語学習を学習者は、一言でいうならば「難しい」「理解できない」「表現できない」と感じ始めるであろう。特に、中学1年の入門基礎に十分な英語音声化能力や言語の運用能力を身に付けられなかった学習者にとっては、英語学習の悪循環におちいっていると考えられる。

その予想される悪循環とは、意識的な音声入力不足の為、英語の聞き取りができない、英語の語彙、英文を音声化できない。その結果、語句レベル、文レベルの基礎表現の足場(scaffolding)となる英語表現が身につかない。言語運用能力をともなう学習活動に参加できない。そして、断片的な知識としての文法や単語の意味を学習する意味も見出せない。擬似的ではあるがコミュニケーションに利用できる、活用できるという学習に有用性を感じることができない。根本的には英語学習への動機付けがなくなる。英語嫌いの学習者は「なぜ英語なんか必要なの。日本人だから英語なんかいらぬ」とよく言う。これは、上記のような英語学習の悪循環に入りこんでいる学習者のメッセージであるかもしれない。

英語学習は英語という言語の知識とそれを運用する技能に関する力を養う必要がある。特に入門

---

2) Language Usage : 言語用法、語法 Language Use : 言語使用

期に基礎・基本を身に付けるには、この両面をバランスよく指導する必要がある。英語という言語体系の知識とは、例えば個々の単語の発音、意味、イントネーション、ストレス、語彙、文法、発話の文脈、発話の状況、発話の意図などコミュニケーションにともなう多くの知識（宣言的知識：declarative knowledge）を意味している。話す、書く、聞く、読む技能の運用とは、どのような場合にどのような知識をどのように使うかという、すなわち知識の使い方（手続き的知識：procedural knowledge）を意味している。適切な英語でコミュニケーションできるようになるには、まず、その技能の遂行者（学習者）自身が「適切な英語」という言語に関する知識や技能の枠組み（framework）や、基準（standard）を持ち、次に現在の自分の知識や技能レベルを認知し、目標とする枠組みや基準に向かって知識や技能の向上を目指して訓練するという行動をとらなければならない。目標とする枠組みや基準と現在の自己の枠組みや基準を監視し調整する力、いわば自己モニター力が必要となる。さらに、このような知識を使うときには、どのような結果になるかという予測し見通す力が必要となる。特に英語学習における自己学習力と動機付けの育成という観点から、今回の中学2年生の個別指導の特色と今後の在り方を展望してみる。

#### 〔ケースレポート〕

学習者A・指導者Bの場合（週1回実施）

##### 【見立て】

Aの英語学力に関する情報を、こちらが全く持っていない状態からの初回指導であった。そこで初回指導では、英語に関するAの学力をつかむこと重要な課題とした。

まずAの第一印象は、元気があって機敏で、かつ天真爛漫という感じであった。「教える一学ぶ」の関係は形成しやすいものと思われた。

Aの近況などについて雑談風に尋ねることをきっかけに、学習に関する話題にうつった。Aの英語への自己評価はどちらかというとい低い方であった。そのため、Aの報告をたよりに、指導を実施（「be動詞の用法」をテーマにした）していくことにした。

ただ、Aの自己報告をもとにして作ったこちらの自作の問題にははすんり答えることができていた。さらに難易度を高めても、解答する力を持っているようだった。そこで、Aの英語に対する自己評価が控えめなものだったことを理解することになった。

##### 【指導の様子】

Aの学力やウィークポイントを理解するための診断的な評価をする指導は、2回目にも及んだ。2回目前半は、様々な難易度の質問を行うことで、Aに英語の学力を理解するのに努めた。

2回目後半ならびに3回目以降の指導では、学校での履修内容に即したテーマを取り上げた。5月から6月前半は助動詞（must, have to, will）の用法を、6月後半は、There is (are) ～の構文が中心だった。

学力的には、教科書に準拠するワークにおさめられた基礎的な問題へは充分に対応できる様子で、それよりも難易度の高い問題でも、半分以上は対応できる様子だった。単語力についてはもう少しあったほうが良いだろうか、という印象を持った。

指導の中では、Aからの自発的な質問も多かった。A自身のモチベーションの高さを実感する

と同時に、指導時間内での「教えるー学ぶ」の関係はうまく成立していると感じた。

ただし、指導予定日への欠席は多かった。実際に用事があったのだろうが、始業時間後に、こちらから校内放送を使って連絡を入れたあとで、欠席の連絡をしていくことが数回あった。

#### 【今後の課題】

個別指導では、一斉指導のように、学力や得意分野に異なる多数の生徒の存在を同時に意識して指導をする必要に迫られることはない。そのかわりとして、個別指導独自の指導スキルを洗練される必要があることをあらためて実感した。具体的には、当該生徒の理解度に合わせて、必要にして十分な説明（特に無駄な説明が多いと、教師が自己満足するだけになってしまう）を施し、演習課題を適宜厳選して提示できるという力量が問われることを実感した。また、そうした実践を可能にするためにも、子どもの学力やウィークポイントを速やかに把握する力量も問われると感じた。B自身の実践を振り返れば、Aの学力を把握する段階で、本人の報告（それは控えめな報告であることがあとでわかったが）をもとに過小評価してしまった。そのため、Aの学力にしてみれば易しすぎる課題を取り組ませて時間を費やしてしまい、個別指導の長所を十分に生かしきれなかったと振り返る。

また、当該生徒の学習に関するプロフィールを理解しやすい個別指導の教師だからこそ、学習内容の指導のみならず、学習者の特性に合わせて「どのような方法で学ぶか」についての助言を積極的に行うことも有意義であると感じた。特に今回の事例に限っては、Aのアシストへの欠席率が高く、数回の指導をするにとどまったことからその必要性を一層痛感した。欠席の理由については、クラブや文化祭などの準備といった、校内でのAの多忙さにあったのかもしれない。Bとしては、限られた指導の中で、「どのような方法で学ぶか」についての話を若干ふれはしたが、まだ言い足りなかったこともあったことが少し心残りでもあった。

#### 学習者C・指導者Dの場合（週1回実施）

##### 【見立て】

まず見立てについてであるが、指導を始めたばかりの段階では、実際の学力と学習者の自分自身に対する学力の見立てにギャップがあるのではないかと感じられた。

Dの印象として、学習者はまずまず安定した学力をもっているように感じたが、Cは英語に対して苦手意識をもっており、あまりできないと語っていた。そこでまず、自分は英語が苦手なのだという意識をなくすことが、英語学習に対する意欲や成績の向上につながるのではないかと考えた。

また、学習中の態度や、定期テストの結果から、英語の学力が低いというよりも、それに取り組む姿勢や集中力が問題となっているように感じられた。つまり、やればできるのだが、苦手意識があるために学習に身が入らず、集中力が欠けてケアレスミスが多くなってしまっているのではないかと考えた。

##### 【指導の様子】

実際の指導に関しては、「ほめてのばす」ということを意識して指導に臨んだ。英語の学習に対してやや不安を抱いているCに対して、「ここができなかった」ということよりも、「ここができた」ということが強く印象に残るように心がけた。教科書の本文の和訳や、その課の重要な表現の短文

の英作文（過去形、未来形など）を中心に指導を行ったが、答えが出てこないときはこちらが答えを言うのではなく、ヒントを与えたりしながら学習者の口から答えが出るようにした。間違えてしまったときは「不正解」と言うのではなく、まず合っていた部分を「そうそうそう」とほめた上で、「あー、ここのとこだけ惜しかったなあ」といった形でやり直させた。学習者は自分の間違いに気づくと勢いよく正解を返してくれることが多くあった。正解したときは少し大げさなほどにほめるようにしたのであるが、これに対しCは少し照れながらも素直に喜んでおり、効果があるように思われた。また、正解がどうしても分からなかった場合には、「あー、これ難しいもんな」「まあ、今はまだこれはできなくてもいいよ」といったフォローをした。

その他に、指導に当たって学習者の個性を活かすということに気を配り、学習者がリラックスして取り組める環境づくりに心がけた。はじめにCに会った際、勉強一筋というタイプではなく、スポーツやいろいろなことに興味がある活発な子というイメージを受けた。そのエネルギーをうまく活用するため、Cが萎縮してしまうことのないようこちらがかしこまった態度をとることはせず、普段どおりの話し言葉で接するようにした。また、その日に学校であったことや趣味についてなどの話も、こちらから働きかけて話すようにした。学習とは直接関係がないが、こうしたやりとりで和やかな雰囲気を作ることが、学習における積極性につながると考えられるのではないだろうか。

#### 【今後の課題】

今後の指導に関しては、これまでに築いてきた信頼関係をもとに、さらにいろいろな学習方法を実践していきたいと思っている。最近では、Cの方からの質問が多くなってきている。これは学習に対する動機づけが高まっている現れであると考えられるのではないだろうか。これを活かして、指導者から学習者への一方通行ではなく、2人で一緒に考えて学習できるようなアシストを目指していきたいと考えている。

### 学習者E・指導者Fの場合（週2回実施）

#### 【見立て】

アシスト初回時に英語が好きかどうか訊いたところ、嫌いという返答。その理由として「丸暗記するだけでつまらない」「授業のペースが早すぎてついてゆけない」「わからないからつまらない」などが挙げられた。また英語のどんなところを難しく感じるかという質問には、「単語がなかなか覚えられない」「文法がややこしい」「動詞の変化（過去形、三人称単数）が難しい」という答えが返ってきた。授業参観の時に、Eの授業態度を観察したところ、挙手がなく、下を向いていることも多く、積極的に参加しているようには見えなかった。Eが英語という教科に対して持つイメージをひととおり聞いた結果、1年生時の成績が良くなかったことから、英語に対して過度な苦手意識を持っていることが推察された。そのような苦手意識を克服するためには、比較的簡単な問題を数多く解いて、「自分でもできるんだ」という効力感をEが積み重ねることが大事だと考え、また単語がなかなか覚えられないということだったので、単語力をつけることも兼ねて毎回単語テストを実施することにした。単語の分量としてはテキスト1ページ分8～10個の新出単語で、この量は無理なく満点に近い点数をとれるよう配慮して決定した。テストとその答え合わせはアシスト時間の一番最初に行った。間違えた単語はノートに書いて復習してもらうことにした。1回の指導は基本

的に①単語テスト、②テキストがどこまで進んだか、またその中でわからなかったところはないかの確認、③指導者が作成した練習問題用のプリント（学習者が苦手な文法、動詞の変化中心）という流れで行った。またEが授業の進行を早いと感じていることから、指導の際は少しづつゆっくりということを中心に心がけた。

#### 【指導の様子】

これまでのところ単語テストの成績は、全問正解か、間違えたとしても1問か2問なので、順調といってよい。しかし、このことがEの効力感につながっているかどうかはよくわからない。これまでに学習したテキストの内容でわからないところは特にないようだが、月や曜日、序数など1年生で習ったことは忘れてしまうようなので復習する必要がある。Fが作成したプリントの問題はEにとって簡単過ぎたようで、予定していたよりも早く終わってしまい、時間を持て余してしまうことが多々あった。練習問題の難易度についてはどのくらいにすればよいのかわからなくて試行錯誤した。教科担任の先生が作成するテストの形式や学習者の過去の成績といったデータがあれば、学習者の弱点がわかり参考になったかもしれない。

授業中、Eの挙手が少ないのは、発言した内容が間違っていたときに、周りの級友にひやかされたことがあるからだということがわかった。このような経験もEの苦手意識を形成する一端を担っているのではないかと考えられた。そこでアシスト時間中に次回の授業で学習すると思われる新出単語を2人で予習することにした。これは教科担任の先生が毎回授業の始めに、新出単語の意味を生徒に挙手させてこたえさせるという方法をとっていることを知っていたためであり、その時にEが少しでも挙手しやすいようにと考えて始めた。挙手発言の機会が増え、教師や級友から承認されるという経験を積むことによってEの苦手意識が克服されることを期待した。Eの主体性を尊重して、指導者は「授業中挙手するように」といった直接的な指示は一切行わないようにした。この指導を始めて、1週間ほど後のアシスト時間中にEから「授業中、手を挙げた」という報告があり、また7月の研究会では教科担任の先生の方からもEは最近授業中手が挙がるようになったという報告を受けた。

#### 【今後の課題】

これからの課題として、Eが記入する学習確認紙を有効に活用できればと考えている。これまでの学習確認紙の内容を見てみると「単語テスト、プリント」としか記入されておらず、具体的な学習内容はほとんど記入されていない。記入の仕方がそもそもよくわからないということもあるかもしれないが、今日は何を学んだのか、その中で自分はどこがわからなかったのかが自覚できていないということも考えられる。そこでこれからはEが記入の仕方に慣れるまで、Fと相談しながら記入していくという形をとりたいと考えている。自分はどこまでわかっているのか、どこからがわかっていないのかわかるような学習確認紙が書ければ理想的であると思われる。

#### 学習者G・指導者Hの場合（週1回実施）

##### 【見立て】

英語についてGは何度か「苦手なほう」と言っていた。しかし、ほんの数回ながら接する限りでは、Hへの乗り出すような質問の仕方や新しいことを知った時の言葉の端々の弾みようなどから、

Gの「英語ともっと親しくなりたい」という強い想いを感じた。

授業や指導時間外から受けたGの印象は、常に仲間と笑顔ではしゃぎ走り回っている無邪気な生徒というものであった。それがひとたび学習を始めると、一気に顔を引き締めることができ、割り切り・線引きのきちんとできる、自己コントロール能力の高い生徒であると感じた。

学習中は物静かであり、はしゃいだりしない。自分の内で物事を整理していく感じであり、自分に足りないもの、いま知らないことを明確に把握しているようであった。そして、それを克服しようとする積極性をも持ち合わせているように感じられた。

#### 【指導の様子】

Gは英語が「苦手」とは言いつつも、教科書で習う文法やその他の事項に、学習上たいした困難をおぼえていないようであった。普段から、適度の予習で十分授業についていっている様子であるし、音読してもらっても、英文の意味を理解した上でなされていってほぼ滞りなかった。ただ、「応用を望む」と言われてこちらが用意した問題を解いた後に、「見たことのない単語が多く出ていた」ことを理由に「難しい」とやや弱気になっていた。文法事項の整理がG一人でも大方出来ているので、Gに何ら問題があると感じなかったが、「単語を知らない」ことや、何かしらとっつけられないものがあることが、Gに英語との間の距離感を覚えさせており、これがGの言うところの「苦手」意識につながっているのではないかと考えた。

G自身はそうした「距離」を少しでも縮めようと、例えば選択授業で英語を第一希望とするなど、英語に接する機会を増やす努力をしていた。また指導者も、この「距離を縮める」ことは指導課題と思い、指導時間中に英会話を意識して織り交ぜるようにした。Gの反応はというと、身近な題材について、手持ちの単語で会話することを、厭わずむしろ積極的に受け入れて取り組んでくれた。話したり、こちらが英語で話した内容を解したりの両方を行ったが、どちらも生き生きのびのびやっていたように回想される。Gの言う「応用」というのは実際的であるものを指すのかと、指導を通して知った。

#### 【今後の課題】

残念ながら、週一回というただでさえ少ない指導時間は、両者の都合でおおいに欠けた。そういった理由と、H自身が個人指導に不慣れであったこともあり、Gに対して体系的な指導を考え、提供していくことが難しかった。ただ、Gのような「授業については問題なし」・「応用を望む」タイプの子への「応用」提供については、英会話を行う機会を出来るだけ与えることが最も適切ではないかと感じた。英語を手段として用いる中で体から取り込んでいく感覚（例えば「知らなくてもへっちゃら」「知ってるものだけでも何とかなる」等）や知識が増えてゆけば、なんとなく抱きがちな英語との距離感を埋めて行けるような気がする。そして、自信を持って英語でコミュニケーションするよう励ましたりフォローを入れていくことの大切さも、今回の指導経験を通して再認識した。

### 学習者I・指導者Jの場合（週1回実施）

#### 【見立て】

Iは英語について不得意な教科と言っていたが、指導を通しては英語に対する苦手意識も感じられず、指導上困難な点も特にはなかった。初対面であったので、控えめな発言をしたのだと思われる

る。また、英語は好きでも嫌いでもないということであった。

Iには、意志が強そうな印象を受けた。授業参観で様子を見ていたとき、英語の授業での単語の発音や文章の訳では積極的な姿勢や発言は見られなかった。しかし、先生が教科書に書かれている内容についての質問をしたとき、クラスが静かになりかけた中、それまで黙っていたIがはっきりと意見を出した。また、指導の際も、英語の構文の説明に対して、はっきりした口調での質問を何度か受けた。

Iは学校のクラブには入っていないが、個人でスポーツを習っており、全国大会で活躍するほどである。夏休み中は合宿で、なかなか学習時間が取れそうにないが、夏休み前から計画的に宿題をこなしているようである。

#### 【指導の様子】

J自身が教育実習などで一ヶ月の間指導を行うことができないこともあり、指導面や学習面での積み上げを行なうことが困難であった。結局、ほんの数回で指導が終了した。

初回の指導では、Iについて少しでも知ることと、特に英語の学習についてI自身がどのように把握しているのかを知ることが目標にした。Jの方から、どこが苦手かとか、何をしたいかなど幾つか質問を出したが、明確な回答が得られなかった。生徒が答えるには無理な質問だったと思い、授業の復習をしていくことを通じて、Iが理解できていない部分を明確にすることにした。そのため、単語・熟語の読み書き発音、文章・構文の読み書き発音等、一通り行なってみた。そこでは、単語・文章・構文など、重要なものは暗記しているが、応用ができないことがあった。そのため、英文の構造の説明を含めて、文章や構文の説明を行なったところ、すごく真剣に、集中する姿が見られた。積極的な質問がでるなど、英語を理解しようという意識も強く感じられた。これらの様子から、普段は英語を暗記だけで憶えており、そのために英語への関心が低いのかかもしれない、と考えた。

また、I本人も言っていたが、発音が苦手なようであった。発音記号の読みがよくわからないので、発音に自信が持てない、授業中にも大きな声で発音することができない、ということであった。

二回目の指導では、Iからの要望により、英語を読むこと、発音に重点をおいて指導を行なった。英語を声に出して読むことに、多少の苦手意識があるようであったが、発音さえ分かれば問題なかった。授業では、流れが速いためか、一つ一つの単語の発音を確認することができなくて、あまり声に出せなかったようである。その他には、時制の変換が苦手とのことであったため、それについての問題を解いた。

Iについては、一つ一つのことを曖昧にしない生徒だと思った。発音にしても、微妙な違いが分からないため、躓いているようだった。そのため、指導者の説明はとても熱心に聞いていた。説明に対しても、疑問に思ふ点があるとはっきりと質問してくるが、授業中には、それができないため、一人で考えているのではないだろうか。それが、見ている側からすると、積極性が見られないように映るのではないかと思われた。

最終の指導では、最終ということが分かっていなかったということと、長期間指導をしていなかったため、Iの様子をよく見ることにした。Iは夏休みに合宿があるため、宿題をする時間がとれず、この場で宿題をしたいとのことだったので、英語の問題集を解いた。分からない問題の説明を少し



入れながら、全体と通しては問題を解く時間が大半だったので、指導らしいことは何もできなかった。

#### 【今後の課題】

全体を通して少ない指導であったので、指導や学習内容を積み上げながら展開していくことができなかった。とても中途半端に終わってしまった感があり、心残りであった。

#### 学習者K・指導者Lの場合（週1回実施）

##### 【見立て】

Kについては、性格は明るく活発な印象を受けた。好きな科目は体育で、英語はあまり好きではない。部活はあるスポーツ部に所属しているが、それとは違うスポーツのクラブチームにも入っており、そのスポーツがかなり好きなのである。またKは家庭教師をつけていて、そこでも英語が指導されているようである。

英語の授業については積極的には参加していないようであったが、授業の予習はかなりしっかりとやっていた。授業のノートはきれいに書かれていたが、授業及び復習のためにいまひとつ使い切れていないようであった。前期試験は平均を少し下回る程度の点数であった。

##### 【指導の様子】

アシスト教室では、前半3回は授業の復習、主に教科書の和訳や配布されている問題集を解いたりした。試験前の2回はKの希望により単語・熟語・英訳の小テストを行った。6回目は試験の復習をするつもりであったが、試験のプリントがなかったためできず、授業の予習を行った。指導中、Kは集中し、まじめに学習に取り組んでいた。また回が進むごとに打ち解けた雰囲気になってきているのではないかと感じられた。しかし英語があまり好きではないということもあってか、問題をあまり考えようとせず、すぐ答えを見ようとしたり、当てずっぽうで適当な答えを端から言ったりすることが多かった。全体的に、英語の内容を深く理解しているとはあまり言えず、暗記して覚えていることを答えるという程度の、表面的な学習に終始している感があった。

##### 【今後の課題】

今後の課題は、英語に対する動機づけをいかに高めるかということである。英語への興味の高まりが、学習内容の理解にもつながるはずである。現在のKにとっての勉強は、学ぶ意味がわからないまま、受動的にただ与えられるだけ、というものになっているのではないだろうか。そのため、何らかの目的意識を持たせる必要があると考えられる。これまでは楽しい雰囲気や気楽にやろうというノリでやってきたのかもしれないが、とりあえずテストの点をとれるような詰め込んだ勉強をした方がもしかしたらいいのかもしれない。

また、効率的な勉強方法を指導することも考えている。例えば上述のように、授業のノートが予習の段階ではしっかり書かれているのに、授業中や復習にほとんど生かされていない。ノートの作り方を見直すことは、その指導の一つであろう。

これまでやってきての反省点は、準備をせずに指導に臨むことが多かったのもので、何をどのようにするかで開始時にもたつく事があったことである。週1回、1時間という限られた時間であるので、計画的にもっとこちらが引っ張っていくような形で進めていくべきだと感じている。

## 学習者M・指導者Nの場合（週1回実施）

### 【見立て】

Mは英文法や英語特有の基本的な決まりごとがしっかり理解できていないために、いろいろなつまずきを見せていた。例えば、主語の後に動詞がくることは理解していたようであったが、その後に「名詞」がくるという認識をしており、目的語や補語といった概念が掴みきれないよう思われた。そのため、単語を覚える際に品詞にも気を配ること、特に動詞は動詞としてしっかり認識することを強調した。また、英作文をさせてみたとき名詞の前にaを付けることを忘れてたり、be動詞が動詞として捉えられていないために第2文型の作文ではbe動詞が抜け落ちてしまうことが多くあった。さらに3単現のSも忘れてしまうことが多いので、基本的な決まりごとを強調して覚えてもらおうと考えた。また、Mは耳から聞いて覚えることが苦手なようであった。単語の発音について何度も言い直しても、その場ではできるのであるが、本文の中のその単語を読むときにはまた間違った発音に戻ってしまうことが殆どであったので、Mの場合は聴覚からの学習に訴えるよりも視覚や手で書いて覚えさせるなどの方略を用いて学習した方が定着しやすいのかもしれないと考えた。ただ、これはまだはっきりとしたものではないと感じられたので、聴覚を含めたいろいろなアプローチを試みようと考えた。

英語そのものに対しては、苦手と感じる一方で、関心を持って「分かって」とする意欲を持っていると感じられた。素朴な質問をしてくることもあったので、少しずつでも英語の知識を体系づけて覚えていってくれればと考えた。

### 【指導の様子】

毎回始める前に、授業の進度と授業中に疑問に感じたことや分からなかったことなどを尋ねた。たいていは質問してきてくれたため、それに答えながら学校の授業内容を復習した。学習の流れとしては、まず教科書の新出単語の発音と意味の確認から始めた。そして、その単元のポイントとなる新しい文法を説明して理解してもらい、それから本文の訳に入った。本文は一文ずつ英語で発音しては訳す方法で確認していった。訳はなるべくMに答えてもらうようにして、間違えたところや分からないところだけを補足していくような形を取った。アシスト教室は毎週あるわけではなく間も空きやすいために、一回のアシストでほしい2パート分はやらなければならない事が多かった。大体このようにして本文を辿っていくと40分から50分くらい経過する。そしてまとめとして、用意してきたプリントの主要な問題を解いてもらったり、即席で作った問題を解いてもらうことで、理解を定着させようと考えた。今までのところ毎回決まった宿題などは出さなかった。

### 【今後の課題】

英語文法をどうしたら整理して理解してもらえるのか、Mに合った学習方法を見つけることが重要であると思われる。まだ文法知識がMの中で混沌としているのだと思われるため、これまで出てきた文法を整理して総復習することも必要かもしれない。アシスト教室のなかでは、Mは自分の知っていることを私の答えを待たず積極的に発言してくれることが多い。Mは、授業中に友だちは難しい質問にも答えられてすごいといていたため、アシストの中ではMを主役にして発言を促し、自信をつけていってもらえればと考えている。「待てること」がアシストのできる最大の利点だと思うため、せかさず焦らせず、Mからの英語に対する自主性や考える力を身につけてもらえるよう

に今後も支援していくことを目指したい。また、今までは宿題はなしであったが、少なくとも単語だけでも覚えてもらえるように、アシストの時間の中で確認する時間を設けることも必要であろう。

#### 学習者O・指導者Pの場合（週1回実施）

##### 【見立て】

Oは、英語を勉強しようとする意志をしっかりと持っているようであった。最初に、Oの英語の苦手分野や勉強方法を質問したところ、「文法問題が苦手で、その対策をしたい」「学校で使っている英語の問題集は使いにくいので、できれば別のプリントを使いたい」ということであった。このように自分で自分の苦手や勉強方法を意識できることについては、勉強に対するやる気がある証拠であると感じた。

また、問題を解く際に、間違えることを怖がらず取り組むところはすばらしいと思ったが、うっかりミスが目立った。例えば、スペルミスがあったり、熟語の暗記が不十分であったり、規則動詞は活用できるのに不規則動詞をたまに間違える、といったことである。

学校の授業にはしっかり参加しているようであり、授業中にわからなかったことなどをOの方から質問してくるなど、意欲が感じられた。

##### 【指導の様子】

Oの担当の掃除が終わったらすぐにアシスト教室に向かって来てくれ、解説をするときもPの方を向いて聞いてくれることなどはPにとってうれしいことであった。そこで、教える側であるPも、できるだけOのほうを見たり、働きかけを増やようにした。たまに、Oのクラスのことや学園祭の出し物のこと、家族・きょうだいのことなどの雑談もした。Oと私のあいだでの双方向のコミュニケーションは結構うまくいっていたのではないかと思われる。

Oが素直で明るいキャラクターだったこともあり、楽しい指導であった。英語を勉強することに對する一生懸命な態度も感じ、Pの方も上手く教えることができれば、と感じた。

実際の学習面では、ケアレスミスが目立ったが、間違えた時には、できるだけO自身が間違いに気づけるように、すぐにPが間違いを指摘することは控えた。

##### 【今後の課題】

解説しているときは理解しているように見え、アシスト教室での問題演習でも正答できるのであるが、いざ試験となると基本的な部分でミスするということが見受けられた。アシストの場面や自分で試験勉強しているときに出来ても、実際の試験で得点できないのは、やはりOにはショックではないかと思われる。Pは、解答用紙を見ていないので確かなことは分らないが、おそらくケアレスミスが少しずつ点数を減らしているのではないかと想像された。

そこで、1：「問題を解いた最後にさっと見直しをする」2：「?やピリオドをちゃんとつけたか、文頭の文字を大文字にしてあるか確かめる」3：「おちついて問題を解く」などを試験前にOに伝えた。かなり基本的なことではあるが、基礎レベルはできているだけに、この部分を気をつけていけば力がもっと伸びていくのではないかと思われる。

## 学習者Q・指導者Rの場合（週2回実施）

### 【見立て】

担当生徒の印象としては、口数が少なく課題を出せばすぐに取り組むという感じで、一見おとなしいようにみえた。ただ、発言などを聞くと、実は元気そうな感じで、慣れていけばもう少し活発な感じを見せてくるのではないかと感じた。

Qは最近になって塾に通い始めたらしいが、英語についてはどうも点数がとれないとのことであった。基本的な文法の確認をしたところ、3単元のSなど重要な文法事項についてはほとんど完璧に問題を正解することができ、また指導者に対する質問も「どうしてlookにはatが必要なのですか」など、非常に鋭いものが多く、学力についてはそれなりに高いものを持っているように感じた。そこで、Qにどういったところで点数がとれないのかを尋ねたところ、問題解くとなるとうまくできない、放送問題をほとんど落としてしまう、と述べた。そこでQと相談すると、放送問題は自分で勉強しにくい、とのことであったため、ヒアリングを中心に指導を進めていくことにした。

### 【指導の様子】

最初、民間の英会話学校の教材を用いて指導をすすめた。その際、Qがボソッと「正しい」答えを言うことがあったが、結局は「わからない」と答える場面があり、そのためQには自信をつけられるよう指導しようと考えた。

そこで、Qからの要望もあったことから、教科書のテープを用い、新出単語も書いておき、ヒアリングを簡単にできるようにした。そして授業でやっているところの次の単元を聞くことで、自分が聞き取ったことが教科書通りになるんだという自信をつけさせようと考えた。さらに、Qがたまにびっくりするほど良くできる時があったのだが、それに対してはほめ言葉を用いた。聞き取れなかったところもすぐに答えを言わないようにした。

前期の試験が迫ったある日、Qが今までのおとなしい感じとは全く違う様子で指導を行う部屋にやってきた。そして、「先生、授業の聞き取り問題ほとんど聞けたよ！」と興奮した様子で話しかけてきた。この出来事以降、Qの意欲はとて高まってきたように感じられた。例えば、綴りを間違えた単語を数回書くように指示したのであるが、その数以上に繰り返して必死に書いていたことなどがあり、それは非常に印象的であった。

このころには「全体を聞きどんな言葉が聞き取れたかを尋ねる→どんなことが書いてあると思うかを尋ねる→一文ずつ聞いて書かせる→分らないところは繰り返し聞く」というスタイルが確立され、この形で指導を行っていた。

### 【今後の課題】

今後の課題については、ここまでに触れてこなかったことであるのだが、Qが途中で眠そうになり、それをどう解決するのかという点である。これについては、Qと相談したところ、単語テストを実施してくれるといい、とのことであったのでそれを行ってはいるのであるが、それでもすぐ眠くなるらしい。ただ一定時間ものすごく眠くなった後は目がさえるらしいため、少しのあいだ待っているという現状ではあるが、今後何らかの形で解決策を考える必要があると思われる。また、ヒアリングについては、現在いくらか予習をしてくれているらしく、純粋にヒアリングの練習になっていないよう感じられることがある。このように動機づけが高まることは望ましいことではあるが、こ

れによりヒアリングの出来が悪くなると、今まで培ってきた自信が低下することも懸念される。そのため、今後教科書とは別の教材で、かつ、教科書と同等レベルの教材を利用して、純粋にヒアリングの練習ができる環境を用意する必要があるだろう。

### 〔個別学習での学習内容〕

まず、ケース報告から見た中学2年生の英語の主な学習内容は、教科書を基本に学校の授業の進度に合わせて学習内容を各指導者が組み立てていた。また、指導者が担当する個々の学習者の学習項目に対する定着度を確認しながら、学習内容の構成を考えていた。その主な学習内容とは、学校で使用する教科書の新出単語の発音と意味、単元のポイントとなる文法の説明と練習、教科書本文の英文和訳、教科書本文にある重要表現の英作文、学校から配付された教科書傍用の問題集を利用した学習、指導者が作成した文法・英単語の練習問題用のプリント学習、指導者が作成した英単語・英熟語・英文和訳の小テストの実施、教科書の各課をヒアリングを通して内容を理解、確認するといったものが主なものであった。

各指導者が行ってきた学習内容を総括すると、アシスト期間中に英語教科書に出てくる語彙、文法、英文の理解、表現力の定着に重点が置かれていた。その学習活動には、方法論的、心理的に個別指導ならではの特色があった。方法論的には、個別学習の最大のメリットである個に応じた柔軟な指導法を用いていた。つまり、学習者の各学習項目の達成度、学習領域や項目への意欲、関心に応じて指導者が授業内容を構成していた。具体的には、聞く力が弱い、文法項目の理解ができていない時には、それに応じた指導項目を選択し集中的な指導をしていた。学習方略に関しては、授業ノート作成の指導、Listeningの効果的な方略、聴覚、視覚を利用した学習方略、文法規則を帰納的に考えさせ、規則発見的な学習方略を個に応じ、必要に応じて指導していた。

学習者への動機付けや心理的な配慮といった観点では、一人一人の個性や学習履歴に応じた指導者と学習者の信頼関係の構築、指導者と学習者の心理的ラポートを高めるような積極的な働きかけをしていた。学習者の学校での生活の様子や、学習者の興味・関心のある話題を用いて双方向のコミュニケーションを促進していた。また、適度な緊張感と言葉の学習に欠かせないリラックスした学習環境作りや、学習内容の丁寧な説明、学習者の質問に対し丁寧で待ちの姿勢でゆったりと答を引き出すアプローチを心がけていた。

上記の様子を具体的に表しているところを指導者のケースレポートから引用してみる。指導者と学習者の心理的關係を示す事例としては、「学習者の特性に合わせて『どのような方法で学ぶか』についての助言を積極的に行うことも有意義であると感じた」、「『ほめてのばす』ということ意識して指導に望んだ」、「英語の学習に対してやや不安を抱いている学習者に対して、『ここができなかった』ということよりも、『ここができた』ということが強く印象に残るように心がけた」などがある。これらの事例は、情意の側面を個に応じた配慮し、学習の動機付けを高めていたことを端的に示している。

個の学習スタイルに一步踏み込んだ事例としては、学習者が英語を手段として使い、体で覚える学習法が有効であると判断した指導者が、身近な題材で英会話を意識的に織り交ぜて英語でコミュニケーションする機会をできるだけ与えるという指導法の取り組みがあった。また、英語を楽しい

雰囲気ノリで学習するタイプの学習者に対して、英語の言語知識的な学習内容を深く頭で考え、理解できるアプローチを試みていた事例もあった。また、英文法のような言語に関する体系的な知識習得が苦手な学習者に対して、学習者を主役にして発言を促し、自信をつけさせることが重要と考え、『『待てること』がアシストのできる最大の利点だと思うため、せかさず焦らず、Mからの英語に対する自主性や考える力を身につけてもらえるように今後も支援していくことを目指したい』といったアプローチを心がけていた事例もあった。さらに、リスニングに苦手意識があり、聞くことを通して学習することに関心のある学習者に対して、教科書の内容を 1) 全体を聞いた後で聞き取れた英単語を確認する。2) 内容把握の質問をする。3) 英語の書き取り (Dictation) を行う。4) 聞き取れない、書き取れない、理解できないところは繰り返し聞くという Listening によるコースウェアの指導法を試みている事例もあった。このように、個の学習スタイル、個の興味・関心、個の学習履歴などを総合的に考慮し学習内容、学習方法を構成していたことがこのケースレポートから分かる。

### 〔個別アシスト学習の展望－英語学習を中心に－〕

学校で行う個別学習の目的は、個に応じた適切な指導を通して各教科の自己学習力や探求力を身に付け、学習への興味・関心を有する基礎学力の習得にあると考えている。このような目的に対して、学校で実施する英語個別学習の改善に向けて今後の在り方を展望してみたい。

英語という言葉の学習において、個に応じた適切な指導を通して各教科の自己学習力を身に付けるには、まず学習者の学習到達度、学習スタイル、興味・関心を適切に客観的に把握し、個の多様性に応じたシラバスをデザインするのが理想である。各学習者に対し、学習到達度を把握するプレースメントテスト、英語の学習スタイルを把握できる学習方略のアンケート、インタビュー等を基にして、個に応じたシラバスを計画立案する。学習や目標の達成度をみながら再度、個に応じて柔軟に補い、修正する。このような応答型のシラバスがあることで、体系的、組織的な個別指導が可能になる。今年度の個別アシスト教室では、個別指導の後で指導者と生徒の両者が学習の記録を取り、学習の達成度、指導の観点を毎回記録した。これが、上記のようなシラバスをデザインするさいの土台となる。

次に、このような英語個別学習シラバスを構築するにあたり、必要となる多様な学習方法を手段として用意しておく必要がある。その一方で、多様性の中にもその基盤として一貫して取り入れられるべき学習法の観点がある。それは、英語音声活動と自己学習力を身に付けた自立的な学習者 (Autonomous Learners) を育成するという観点が指導法の中に貫かれているのが望ましい。前述したように、目標とする枠組みや基準と現在の自分のそれを監視し調整する力、自己モニター力を身に付ける観点が基本にあることが望ましい。シラバスを構成するもう一つの観点は、個に応じたドリル的な学習とコミュニケーション活動をともなう実践的な活動を学習者に応じてバランスよく用意する必要がある。機械的なドリル学習も入門期には欠かせないが、機械的に問題を行う (暗記が中心になる) ため、退屈な活動にもなる。しかし、ドリル的であっても単純なタスクを学習者に課すことにより、深く学習に入り込んだり、変化のある繰り返しにより定着度が改善されることもある。そして、言語コミュニケーション活動を取り入れる理由は、動機付けの面からもコミュニケー

ションの道具として活用できるという自己認識を育成する目的がある。

英語学習につまずく学習者に共通する1つの特色として、英語基本語彙を音声化できない、英文の読みができないという現象がよく見られる。語彙レベルでは、英単語を聞き取れない、英単語の発音ができないことにより、英単語を覚えられない、英単語の意味を覚えられない、英単語が書けないということになる。語句や英文レベルでは、声にだして読めない、英文の内容理解ができない、英語による表現力が身に付かないという悪循環に陥っていくと考えられる。英語学習の基本、または言葉の学習の基本からも、音声活動に重点を置いた英語学習が学習内容、学習活動のベースとなる。

今日までに開発されてきた英語教授法は数あるが、音声活動を基本にしない語学の教授法は存在しないと言える。英語学習の初期段階では、4技能（Listening, Speaking, Reading, Writing）がバランスよく行われることが望ましいが、特に英語学習が苦手な学習者には飽きのこない意味のある繰り返しによる英語音声活動を充分取り入れることが基礎固めの鍵となる。次に音声と文字をつなぐ基本的なフォニックスのルールを必要に応じて組み込むことにより、音声と文字をつなぎ、学習の基礎力がより増す。

次に、もう少し具体的に音声活動に関する実践例を一つ取りあげてみる。英語学習入門期の音読指導を具体例に、自己モニター力を育成する方法と、それにもとない要求される基礎・基本の力を考えてみる。学習場面として、教科書のあるレッスンの復習時の音読の場面を想定する。まず、テープやCDを学習者に聞かせるという単純な活動で自己モニター力を高める方法を提示する。

モデルとしてテープやCDを聞かせる時にも学習者に何も活動させないのではなく、簡単なタスクを課してみる。まず、声を出さずに教科書を見ながらリピーティングをさせる。この時自己モニターは、視覚と聴覚という入力を通して、モデルであるネイティブの話す個々の単語の発音、同化や異化した音、ストレス、イントネーション等の後を追いついて模倣していることになる。声を出さずにリピーティングするという一見単純なタスクだが、学習者がリピーティングできるところと、できないところが出てくる。そこに、注意をうながしもう一度聞かせたり、できなかった個所に印をつけたり、後でまとめさせたりする。この時自己モニターは、音声モデルと比較し、くり返して模倣できない自己の音声に気づくことになる。抽象的な表現で言うなら、目標とする音声基準を模倣し、模倣できない自己の音声基準を認知した状態である。さらに、模倣できなかった個所をリピーティングできるように意識させ聞かせる。自己モニターは、目標とする音声基準と自己の音声基準とに選択的な注意を向け、調整していることになる。

さらに、リピーティングにおけるバリエーションを提示する。1) 声を出さずに教科書を見ずにリピーティング 2) 声を出して教科書を見ながらリピーティング 3) 声を出し立って教科書を見ながらリピーティング 4) 声を出し立って、聞かせる相手を想定して教科書を見ながらリピーティングなどである。単純な変化ではあるが、リピーティングにも意味のある繰り返しができる。一斉指導ではクラメートの視線など情意面での阻害要因があるが、個別指導ではこのような音声面での活動が、情意面でのプレッシャーが少なく、活動量でも十分な活動が行える。音声活動を基盤に、語彙学習、文法学習、表現学習にも自己学習力を育てる多様な学習活動を用意し、個に応じた個別学習シラバスを作成していく必要がある。

このような活動を行うさいの素材となる言語材料にも配慮が必要である。個々の学習の達成度により、取り扱う言語材料が適切である必要がある。また、学習のタスクや学習の内容にも個に応じた適切な選択と配列が必要である。個別指導であるからこそ、このような選択も十分にできる。このように個に応じて最適化された学習素材を蓄積し、教材化することにより今後の個別学習をより個に応じた効率化と最適化が可能となる。また、コンピューターを活用することにより、蓄積された学習教材を幅広く活用できる可能性がある。また、<sup>3)</sup>コンピューター利用での個別指導により、自由な時間に、各自が自分のペースで学習することも可能となる。

#### 〔個別アシスト学習の展望－運営・研究体制を中心に－〕

今回の個別学習アシスト教室の実践研究を基礎に、附属学校と教育学部の共同実践研究として一層充実、発展していく必要がある。充実、発展させる具体的方策を検討するさいに、いくつか考慮すべき観点が明らかになった。まず始めに、附属学校の教官の個別学習アシスト教室指導への組織的、計画的な参加である。個に応じたシラバスデザインの作成にさいし、当該学年を担当する教科の教官が定期的に参加し、助言する組織が附属学校に必要である。前述した学習の記録を基に、個に応じた学習内容のシラバス作り、自己学習力の向上を目標にした学習方略の方向づけ、動機付けを促進する為にも、附属学校の担当教官の組織的な参加と、計画性のある助言が必要と考えるからである。

一方、このような個別指導を学部の教育課程の中に組み込み、教育学部の実践研究のフィールドとして位置付け、教育方法論、学習指導論、学習心理等の分野から積極的に位置づける体制が望まれる。少なくとも教職課程を取る学生には、教育実習期間の4週間への延長、充実という観点からもこの個別学習を義務づけるという案も考えられる。また、授業後の個別指導という方法だけではなく、一斉指導の中での個別指導、TTの効果的指導法の研修、研究という方法での発展の方向性もある。

#### 〔引用文献〕

- 速水敏彦・中西良文・矢木修・藤田高弘 2001 個別学習アシスト教室の開設と今後の方向 名古屋大学教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）48, 207-215.1  
神宮英夫『スキルの認知心理学』川島書房 1993

---

3) コンピュータ利用に適した学習内容、学習方法、及び個別指導、全体指導のバランス等を個に応じて考慮する必要がある。